

中国人日本語学習者における感謝発話行為の中間言語研究

張, 琦

<https://hdl.handle.net/2324/4495979>

出版情報：九州大学, 2021, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



| | | | | |
|--------|----------------------------|-------|-----|------|
| 氏名 | 張 琦 | | | |
| 論文名 | 中国人日本語学習者における感謝発話行為の中間言語研究 | | | |
| 論文調査委員 | 主査 | 九州大学 | 准教授 | 志水俊広 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 松永典子 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 郭俊海 |
| | 副査 | 九州大学 | 准教授 | 李相穆 |
| | 副査 | 元九州大学 | 教授 | 松村瑞子 |

論文審査の結果の要旨

本研究は、中間言語語用論の立場から中国人日本語学習者を対象に、日本語の感謝発話行為についての理解及び産出の実態を明らかにし、その研究結果を日本語教育に応用することを目的とする。従来の中間言語語用論研究は、中国人学習者を対象とするものが極めて少ない。「感謝場面の詫び表現の使用」、「後日の再感謝」など個別に研究されてきたが、学習者における感謝発話行為の中間言語については、総合的に考察されておらず、未解明な点が多い。

本研究は、発話行為理論、ポライトネス理論と The Bulge 理論の枠組みに従って論考を行った。まず、日本語と中国語の母語話者調査では、テレビドラマのデータに基づき、日中の感謝発話行為の異同を把握した。次に、日本語学習者の感謝発話行為についての理解調査では、筆者作成の多肢選択式のアンケート調査に基づき、日本人との異同を検討した。さらに、学習者の感謝発話行為の産出調査では、筆者作成の談話完成テストと日本語学習者コーパスから得られたデータに基づいて分析した。最後に、学習者の中間言語の実態を踏まえた上で、日本語教科書の感謝発話行為についての指導の問題点を指摘した。

論文における各章の概要は以下の通りである。

序章では、研究背景、研究対象、研究目的、研究方法及び論文の構成について述べた。

第1章では、まず感謝の定義に関する研究を概観し、本研究で扱う感謝を定義した。次に、感謝表現に関する先行研究を紹介し、先行研究の問題点を指摘し、本研究の位置づけを述べた。先行研究については、日本語の感謝表現に関する研究、中国語の感謝表現に感謝する研究、感謝表現に関する対照研究、及び感謝表現に関する第二言語習得研究の4つに分けて概観した。

第2章では、第1章で指摘した先行研究の問題点を踏まえ、本論の研究課題を提示した。ならびに、それらの研究課題を解決するために用いられる理論的枠組みを述べた。

第3章では、テレビドラマを利用し、日中両言語の感謝発話行為の異同、特に聞き手による使い分けについて調査した。具体的には、Spencer-Oatey (2000) の発話行為の分析方法を援用し、感謝を表すときに現れた感謝ストラテジーの種類、感謝発話行為の直接性・間接性、感謝発話行為の格上げ・格下げ表現について考察した。その結果、以下のことがわかった。①ストラテジーとしては、日本語は「受益事実の表明」と「謝罪」の使用率が比較的高く、中国語は「称賛」と「同意表明」の使用率が比較的高い。また「物の不必要性への言及」と「反問」は中国語特有のストラテジーである。②中国人は相手との親疎関係により、直接／間接発話行為を使い分ける一方、日本人は相手との親疎によらず、親しい相手に対しても直接発話行為の「ありがとう」を言わなければならない

場合が多い。③日本語は文末の終助詞を通して間接的に感謝の効果をもたせようとするが、中国語は感謝発話の繰り返しによって感謝の気持ちを直接強める。

第4章では、多肢選択式のアンケート調査を用いて、同じ場面で使用される感謝ストラテジーに対する違和感の有無、感謝の気持ちを感じるかどうかについて、日本語学習者と日本語母語話者の違いを考察した。その結果、以下のことがわかった。学習者と日本語母語話者とは、感謝の生じる場面において感謝の気持ちの度合いよりその気持ちの表し方に対する認識の方が特に異なる。日本語学習者は、ウチの人に対する『ありがとう』の使用と、ソト・ヨソの人に対する「すみません」の多用に違和感を抱く。

第5章では、まず、談話完成テストを実施し、中国人日本語学習者、日本語母語話者、中国語母語話者の使用する感謝発話行為を整理した。次に、日本語母語話者と中国人日本語学習者、それぞれの感謝発話行為の特徴を、ポライトネス理論と **The Bulge** 理論を使って分析し、語用論的転移を考察した。その結果、以下のことがわかった。①授益行為に対する非言語行為の回答率は、学習者は日本語母語話者と中国語母語話者の真ん中にある。②直接ストラテジーの使用について、学習者の母語転移（中核行為＋呼称）が見られた。間接ストラテジーとしての「謝罪」の割合について、日本語母語話者より学習者の回答率はやや低い。「気持ちの表明」については、日本語母語話者は「驚き」の気持ちに重点をおき、学習者は「嬉しい」気持ちに重点をおく。

第6章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス（略称 I-JAS）』、『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス（略称 C-JAS）』、『日本語学習者会話データベース』を利用し、日本語学習者の感謝発話行為の特徴や誤用について調査し、誤用の原因を究明した。その結果、以下のことがわかった。①中上級学習者の産出にも「感謝の中核行為＋呼称」のような語用論的転移が見られた。②感謝の時制について、学習者の「ありがとうございます／ありがとうございました」の誤用が目立った。感謝の対象が a. 感謝を呼び起こす発話行為、b. 完結認識のない実質的行為、c. 完結認識のある実質的行為である場合に、誤用が起こっていた。

第7章では、日本と中国で主に使用される日本語の教科書で感謝発話行為がどのように扱われているのかを考察するため、合計14冊の教科書について調査し、問題点を指摘した。

終章では、本論の研究課題に対して明らかになったことをまとめ、今後の課題について述べた。

以上のように、本論文は中国人日本語学習者における感謝発話行為の中間言語を様々なデータから実証的に明らかにしようとしたものであり、貴重な知見を提供してくれるものとして評価でき、第二言語習得理論および日本語教育の分野において価値ある貢献となるものである。よって、論文調査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するに値すると判断した。